

# 猿の裁判

二匹の猫が、どこかで、大きな牛肉、一片を盗んでしまったが、さて、それを、わけるときになつて、どつちが多いとか、どつちが少いかいつて中々、お話がまとまりません。そこで、自分よりは賢いといふ評判のある、猿の所へ、其肉を持って行つて、甘く分けてもらふことにしました。

すると、猿の先生、二片の肉を、秤にかけて見て、『なるほど、こつちが、少々重い様だな』といつ



少くなるので、

『あ、もし、其残つた分を、私共へ分けて下

て、其餘計な方の肉を少しひさちぎつて、すぐみシャ〜と頬張つてしまふ。すると、今度目は、

其方が反つて軽くなつてしまつて、前に軽いといつた方が、あべこべに、重くなつたので、猿の先生、少々考へて、

『や、今度は、こつちが、重くなつた様だ』といつて、又其方の肉を引きさちぎつて、頬張つて仕舞ふ、

二匹の猫は、夫を見て居つたが、自分等の肉が、だん〜

さい。もう、決して多い少いといつて喧嘩はしなせんから』すると、猿先生は

『喧嘩しないなら、始めからしないが、いゝじやないか、裁判にもち出したからは、裁判官は、どこまでも公平に、分けてやらねばならぬ』

といつて、二片の肉を、秤つて見ては、ちぎり秤つて見てはちぎりして、とう／＼、残りがなくなりそうになつて、しまつたので、二匹の猫は、も一耐らなくなつて、『どうか少くつてもいゝから、せめて、其残りを、分けて下さう』と願つた所が『いや、この残りは裁判をした賃に、私が貰つて置くのだ』といつて、一頬張りに残りの分も食べて仕舞ひましたと。

いそつぷ物語

其冊一 狐と山羊

一匹の狐が、深い井の中に落ち込んで、上ることができないで難儀して居る處へ喉が渴いた／＼といひながら、一匹の山羊がやつて来て、ひよいとい、其井の中をのぞき込んで見て、狐に、井の水が、いゝか、どうかと尋ねました。狐は、自分の辛い事は隠して態と、愉快相に、水は餘程奇麗だし、冷たいから、すぐ下りて来て飲んで見玉へ、と下からいひました。山羊は、も一水飲みたい一方で、他の事は考へる暇なしに、すぐ飛び込んで、先づ一口飲んで見た。そこで狐は、始めて、此井から上ることの難しいといふことを話して、さて申しますには、